

国語 読解演習と知識整理

物語…直接えがかれぬ気持ちを読み取る

物語…直接えがかれぬ気持ちを読み取る 要点

▼▼中学校の国語では、教科書の文章を授業を通して学ぶだけではなく、初めて見る文章を自分で読み取るためにも、対策が必要でず。学校での学びにプラスして、国語の学習をしていきましょう。

今回の内容を学習すると……

中学校の「物語」で読み取ることが求められる「文章の中ではつきりえがかれていない登場人物の気持ち」をおさえることができるようになります。

登場人物の気持ちを読み取るためには……

- ① 気持ちが直接えがかれているところから読み取る。
- ② 人物の行動や表情から読み取る。
- ③ 人物の言葉や口調から読み取る。
- ④ 情景から人物の気持ちを読み取る。

- ① 気持ちが直接えがかれているところから読み取る。
 - 「うれしい」「かなしい」「〜と思った」などの、気持ちが述べられた表現に注目する

- ② 人物の行動や表情から読み取る。

- 「拍手をした」などの行動の意味からとらえる
- どのような様子で行動しているかに注意する

- ③ 人物の言葉や口調から読み取る。

- 「ありがとう」などの言葉そのものの意味をとらえる
- どのような話し方をしているのかに気をつけて読む

- ④ 情景から人物の気持ちを読み取る。

- 人物をとりまく景色がどのようにえがかれているかに注意する
- 情景の意味（虹・雨など）をとらえる

例文で確認

1

次の文章を読んで、マリコがミユキの言葉を、どんな気持ちで聞いたのか、考えてみましょう。

マリコは次の日、バレーボールの練習を休んだ。夜、おかあさんが「ミユキちゃんが来てくれたわよ」と言う。急いで玄関に行く、キャプテンのミユキが立っていた。

「コーチの言葉なんて気にしないでいいよ。コーチがまたマリコをこまらせるようなことがあったら、わたしが言っておあげる。だいじょうぶだよ。だから、明日は必ず来てよ！」

元気に、たのしく、ミユキは言った。かぎりなく明るいその目。ミユキは、いつも強く、思い通りに生きている子なんだ。マリコはミユキから目をそらせた。ミユキのようになれたら、練習を休むなんてことしなかった。

(Z会編集部書きおろし)

次のア・イについて、どちらが問題文の内容に合うでしょうか。

- ア マリコはミユキの言葉をうれしく思った。
イ マリコはミユキの言葉を受けいれることができなかった。

例文で確認！ 2

次の文章を読んで、「ぼく」の気持ちを考えましょう。

「昨日は、ひどいことを言ってごめん。」

ぼくは、思いきって切り出した。でも、アキは泣くのをがまんしているような表情で、口をきくと結んだまま、教室から出ていってしまった。

(あの一言で、こんなにアキを傷つけてしまったなんて……。) ぼくはそこからしばらく動けなかった。ふとまどの外を見ると、空はどんよりくもっていて、今にも雨が降り出しそうだった。

(Z会編集部書きおろし)

「ぼく」の気持ちが表れていると考えられる情景の説明はどのようにか。線を引いてください。

(そこから)

「ぼく」は、後悔し、悲しい気持ちであるということを読み取ります。

かけしポイント

「気持ちが直接えがかれているところ」「物語のストーリー」をおさえるだけでは読み解けないのが、中学校で学習する物語です。「動作や表情、言葉や口調、情景」をチェックし、線を引きながら読み進めていくようにしましょう。それらを根拠として、「気持ち」を確実に説明できるようにすることが大切です。

物語…直接えがれない気持ちを読み取る 例題

例題

「わたし」の気持ちが読み取れる表現に注意して次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

小学六年生の鳥居羽美は、学校で『わたしの将来』というタイトルの作文を書くことになったが、書き出しても自分の気持ちとずれている気がして、なかなか書き進められないでいる。

(みんなは、書けるのかな?)

そっと、教室を見まわしてみた。けんめいに鉛筆を動かしていたり、書きおわってだるそうに机につぶしていたりときまざま。でも、わたしみたいに、ぼうつとまよってばかりの人は、いないようだ。

「鳥居さん。どうしたの?」

担任の相原先生が、足をとめ、わたしの原稿用紙をのぞきこんだ。

ベージュのブラウスにひざだけのスカート。地味でまじめな印象から、相原先生は、三十さといって年よりもずっと上に見える。四月に六年二組を受けもつてから、あだ名もつかず、ずっと相原先生とよばれているのも、きっとそんな先生だからだ。一

10

組の竹沢先生なんて、すぐにタケツチつてよばれ、したわれている。

「なんか、まよっちゃって……」

「考えすぎないで。すなおな鳥居さんらしいことを書けばいいのよ。自分の好きなことや楽しいことを、思いだしてみるといいわ」

相原先生は、わたしの肩を軽くもんでくれた。肩の力をぬいてって、いいたいみたい。

「はい」

小さくうなずくと、相原先生はにっこりして黒板のほうへ歩きました。

(ふうっ)

頭を軽くふると、今度こそ書こうと、鉛筆を持ちなおした。今、楽しいことは、バレーボールクラブだ。放課後練習している。夢中になってボールを追いかけていると時間をわすれられるし、むずかしい角度のボールをレシーブできたりすると、その日はずっと気分がいい。

中学に入っても、バレーボールは続けるつもり。だけど、それが将来の夢につながるかといえばちがう。

(夢もないまま、中学生か。いいのかな。こんなんて……)

鉛筆の先で、消しゴムをつつついた。

赤羽しゅんこ『ピアスの星』(くもん出版刊)

30

25

20

15

問——部の行動から「わたし」のどのような気持ちが読み取れますか。適切なものを次の中から一つ選び、記号を書きなさい。

- ア 作文が書けないことに対するあきらめの気持ち。
- イ 作文よりもバレーボールをやりたいという気持ち。
- ウ 作文を書き進めているみんながうらやましい気持ち。
- エ 夢もないまま中学生になることへのゆううつな気持ち。



かけはしポイント

「動作や表情、言葉や口調、情景」をチェックし、問題文に線を引きながら考えてみましょう。